

? 中東 7 アルジェリア 伝統服からイスラム服へ

著者	宮治 一雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	88
雑誌名	「きもの」と「くらし」 : 第三世界の日常着
ページ	158-164
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017850

伝統服からイスラム服へ

宮治 一雄

伝統服としての
ヴェール

私をはじめアルジェリアを訪問したのは、一九六八年だったが、当時の私にとっては見るもの、聞くものすべてが珍しく新鮮に思われた。なかでも印象に残っているのは、人々の暮らし方、たとえばヴェールをまとった女性の姿である。ヴェールといってもアルジェリアの伝統では、ハイクという一枚の大きな薄手の布を頭からすっぽりとかぶって全身を被い、顔の下半分だけを別にハジャールという三角巾で隠すというスタイルが一般的であった。衣服としての機能からみると、ハイクには防寒の意味はあまりなく、主として日除けとボロ隠しに役立つ。ハイクさえまえば、下にどのようなボロを着ていても、まったくわからない。いうまでもないが、隠すというのは、隠れたものを顕示するというもう一つの機能を伴っている。文学的に形容すれば、ハイクとハジャールの蔭からのぞく妖艶な瞳、ということころだろうか。

それ以上にハイク、一般的にはヴェールの意味は、社会的な隔離のためである。ヴェールは、外出するときだけでなく、家族以外の男がいる場合にも着けなければならない。ヴェール着用は、しばしばイスラムと結び付けて説明されるが、宗教的な義務というよりも、社会的な規範としての性格が強いものであり、家長制社会を維持するための道具であつた。それだけにヴェールを脱ぐことが、当時のアルジェリアでは女性解放、近代化の象徴とみなされていた。

その後、一九七四年、八〇年、八四年と、何回かアルジェリアを訪問したが、そのたびに経済開発が進展し、それとともに生活水準が向上して、ボロをまとっている人々が減少していく様子がはつきりと見てとれた。女性とくに既婚女性の職場進出も進み、働く女性のなかでも、家政婦たちは昔ながらのハイクを捨てなかつたが、オフィスで働く女性や大学生がヴェールを着用するというのは、よほど嫉妬深い夫や保守的な父親をもっている場合以外にはまず考えられないことだつた。

イスラム服としての ヴェール

ところが、どうだろう。一九八八年十月にアルジェリアを訪れてみると、若い女性たちのヴェール姿が大学のキャンパスにも街頭にも驚くほど増えているではないか。その時は「アルジェ暴動」の最中でわずか一週間の滞在だったが、九〇年一月から海外調査員として一年あまり滞在しているうちに、いろいろなことがわかつてきた。

まずスタイルからみると、同じヴェール姿でもハイクとハジャールを組み合わせた伝統服と新

しい「イスラム服」はまったく異なるものである。すなわち「イスラム服」は一枚の布ではなく、袖があるワンピースであり、ウエストラインをしばらずに、裾が長くて踝まで隠すだけの丈がある。ハジャーブルは着けずに、ネックチーフで髪の毛だけを覆う。

つぎに機能を見ると、袖が付いているから、ハイクのように片手で襟元を抑えている必要はないが、裾が長いので動作が不自由で労働には向かない。顔をむき出しにしているから、日除け効果は減少するだろうが、防寒機能は向上したはずである。隠すという機能については、身体の曲線は見え難くするが、顔を隠さないから、かつての男女隔離という意味とは明らかに異なるものである。しかも重要なのは、伝統服と「イスラム服」の間に大きな差異があるということ、それを着ている当の女性だけでなく、まわりの人々も明確に意識しているということである。かつてはハイクを脱ぐことが、女性解放の象徴と考えられていたのに、なぜ今、アルジェリアの女性たちが、「イスラム服」をまとうようになったのだろうか。

イスラム服と
モ ン ペ 姿
やや奇異に感じられるかもしれないが、私はそれを戦争中の日本の「モンペ姿」との対比で説明することができると思う。

まず第一に、「イスラム服」の着用には、自発的な場合と、外部の強制による場合とがある。熱心な信者は、イスラムへの帰依を表明するために伝統服と西欧服をともに否定して、「イスラム服」を身に着ける。イスラム勢力の台頭と同じで、その背景には政治体制や経済開発路線への批判が込められているわけである。



イスラム服(左手前2人), 伝統服(後の2人)の女性(アルジェにて, 1987年。撮影: 宮治美江子)

それに対して「イスラム服」を着ていないと、熱心なイスラム運動家からいやがらせを受け、外出さえ思うにまかせなくなるので、仕方なしに着用する人もいる。日頃は威張っている父親が何もいわないのに、見も知らぬ若者がおせっかいするのは納得できないと愚痴をいいながら、内面的な自由を守るためには外見については妥協するほかないと諦めているのだ、と説明してく

れた女性がいる。

さらに自発的と強制的の間には、時代思潮の変化のなかで「イスラム服」の流行を抵抗なく受け入れた女性もいる。ムード派というか、ファッションとしてかっこいいから着用するのである。とくに、若い娘たちがネックチーフをただ被るのではなく、ピンを一ダース近く使い、時間をかけて優美な姿に整えているのを見ると、乙女心はどこでも同じだなあ、と思った。

「イスラム服」の着用の動機はこのように多様であるが、それを集団表象とし

てみると、翼賛体制の信奉者と追隨者が「モンペ姿」になったのと共通していることがわかるだろ。

第二に、「イスラム服」の流行は、経済不況と密接に関連している。もともとアルジェリアでは衣類などの消費物資を輸入によってまかなっていたが、一九八六年以降の石油価格下落によって経済が悪化し、輸入抑制のために物資が出回らなくなった。「モンペ姿」が流行したのは「欲しがりません、勝つまでは」というモノ不足経済下であったが、「イスラム服」の流行もやはり一部の成金が華美な服装にふけり、大半の庶民が窮乏生活に耐えなければならなくなった状態が発生した現象である。社会的公正が消費生活の向上を通じてではなく、消費をガマンするうえでの平等としてしか実現できない、そういうなかでの流行なのである。

モノ不足と外貨不足のもとで、いかに「イスラム服」の布地を調達するか、面白いエピソードがあるので紹介しておこう。アルジェリアでは、政府がイスラムを擁護しているから、国内では五〇ディナールでコーランを買い取る。そのコーランをフランスへ持ち出すとムスリム移民の間でイスラム熱が高まっているので二〇〇フランで売ることができる。その金で布地を購入し、アルジェリアにかえって「イスラム服」に仕立てる。公式レートは一九八〇年代末までほぼ一対一であったが、ヤミ・レートでは一フランが五ディナールにも相当したことを考えると、コーランを媒介にしたイスラム・レートでは逆に一ディナールが四フランに相当するわけであり、たいへん有利な取引を成り立たせることができる。アッラーのご利益にほかならない。

第三に、「モンペ姿」と異なってみえるが、実は共通している点がある。現在のアルジェリアでは不況が進み、労働市場における男と女の競争がきわめて熾烈になっている。イスラム勢力が、宗教的な熱意から「女は家庭に帰れ」というスローガンを掲げ、「イスラム服」を着せて女を家庭内に閉じこめるキャンペーンを繰り広げると、それが仕事のない男たちから熱狂的に受け入れられるのだ。この点、男たちが戦場に駆り立てられた後、銃後の女たちが「モンペ姿」になって勤労に従事したことと一見対照的に見える。ところがそれは、家父長制原理に立つ社会が女たちへの統制を強化することによって、秩序の維持をはかるという点で共通しているのである。

イスラム服の将来

「モンペ姿」は、敗戦後、翼賛体制が崩壊してからもしばらくは見かけたが、モノが出回るようになり、戦後民主主義が謳歌されるようになると、都会の街頭からすっかり姿を消し、やがて農作業着としてのモンペも減少していった。それでは、アルジェリアの「イスラム服」は、これからどうなるのだろうか。

第一に、政治的な条件からみると、アルジェリアでは、現在イスラム勢力は野党の立場にあり、政府が「イスラム服」を強制したり、奨励したりしていない。ところがイランのようにイスラム政権が成立すれば、政府は社会倫理の守り手であることを示威するために、女たちに「イスラム服」を強制するだろう。体制派と反体制派を見分ける踏み絵として、「イスラム服」を利用し、「イスラム服」の着用を拒む者を反体制派として弾圧するだろう。アルジェリアでは、一九九二年一月の超憲法的措置によって、イスラム政権の成立を防止し、イスラム勢力を弾圧したわけだ

が、現政権が持ちこたえられるかどうか、予断を許さないものがある。

第二に、「イスラム服」の流行をもたらした経済不況はどうなるのだろうか。経済改革という名目で政府は構造調整を進め、庶民は耐乏生活を余儀なくされている。景気の動向は、政府や庶民の努力というよりも、石油価格の動向という外生的要因に依拠しているが、もともと「イスラム服」にはポロ隠しと贅沢隠しという二つの機能が備わっている。モノが出回るようになってからも「イスラム服」が少なくなることはないように思われる。ここでは、アメリカの大不況がチャールストンの流行を招いたのと同じような、大衆社会化状況がアルジェリアでも進んでいることを確認しておくにとどめておきたい。

第三に、家父長制社会の論理という点では、アルジェリアは、近代化が進んだチュニジアはむしろんのこと、モロッコに比べても古い社会の特徴が残されている国である。激しい独立戦争や社会主義指向も、アルジェリア社会の保守的性格を大きく変えることができなかった。だからこそ「イスラム服」が短期間で普及したわけだが、もともとアルジェリア文化には内陸的性格と地中海的性格とが混在している。保守性は内陸的性格に由来するものであるが、一方に片寄ると必ず揺り戻しがある。平均的なアルジェリア人が地中海的性格をあわせ持っていることを考えると、活動性に欠け、美的な観点からいっても醜悪な「イスラム服」が、長い間アルジェリアに定着するとは考えられないのである。